

|         |  |         |         |
|---------|--|---------|---------|
| 氏名      | 三 枝 道 尚  |         |         |
| 学位の種類   | 医 学 博 士  |         |         |
| 学位授与番号  | 博甲第 772 号  |         |         |
| 学位授与の日付 | 平成元年 3 月 31 日  |         |         |
| 学位授与の要件 | 医学研究科外科系泌尿器科学専攻<br>(学位規則第 5 条第 1 項該当)  |         |         |
| 学位論文題目  | 膀胱腫瘍における Malignant potential の指標としての ABH-isoantigen CEA, BMG, Leu-M1, H抗原の併用に関する検討 |         |         |
| 論文審査委員  | 教授 赤木忠厚  | 教授 折田薫三 | 教授 粟井通泰 |

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

表在性膀胱腫瘍は再発率が60~80%と高く、その10~20%に生じる浸潤性腫瘍への進展 (malignant progression)が予後に影響する。このmalignant progressionは、腫瘍細胞の血液型抗原(BGA)の消失の有無により、ある程度事前に予測可能なことが判明している。しかし、血液型抗原単独による判定には、血液型物質構造の差異、判定の客観性等の問題点が残っている。これらを解決するには、BGAに新しい予測因子を併用する方法が最も妥当であると考え、表在性膀胱腫瘍43例を対象に、腫瘍細胞のBGA、CEA、BMG ( $\beta_2$ -microglobulin)、Leu-M1 (移行上皮癌にも特異性を有する human myelomonocytic antigen)、H-Ag (血液型O型の赤血球表面抗原)を酵素抗体法(PAP法)を用いて検索し、BGAにこれらの因子を併用することの有用性を検討した。その結果、BGAを基本とするBGAとLeu-M1との併用による分類で、BGA単独での問題点をある程度解消できるだけでなく、BGA単独に比して、より客観的な予後予測が可能と考えられた。そこで、BGAとLeu-M1の2者併用による膀胱腫瘍のmalignant potentialの新しい判定法を提唱した。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は膀胱腫瘍におけるABH-isoantigen(BGA)、CEA、 $\beta_2$ ミクログロブリン、Leu M1、H抗原を免疫組織学的に検索し、染色性とmalignant progressionの相関をみたものであるが、malignant potentialの指標としてBGAとLeu M1を併用することの有用性を確立したのものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。